

Old myths of rascal raccoon-dogs? Nope, perhaps legends of accused tanukis.

徳島大学薬学部 藤野 裕道 (35期 1992年卒)

阿波の国、徳島県にはタヌキにまつわる話が沢山あります。あるひと曰く、その理由は、四国中のキツネが安芸の国(広島)に移り住んだので、相対的にタヌキが多くなったからだとか(元禄2年(1689年)、本朝故事因縁集巻二より)。またあるひと曰く、さまざまな騒動を起こした人びとを、タヌキに見立てて言い伝えたとか。そんな徳島県内には数多くのタヌキの小さな祠と共に、それぞれの土地ごとの伝承も残されています(写真① 筆者撮影)。これらタヌキの話は「伝説」であり、「どここの」とか、「誰々が」とか、特定できる場所やひとが登場します。そのため、「昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが」、などから始まる「昔話」とは異なり、少しだけ現実味を帯びていたりもするのです。

たとえば、徳島市庄町の桑原さんの語り。

『見渡すかぎり似たような田圃ばっかしが、どこまでも続いとって、家やいうても、ほんまにバラ、バラでありましてな。不動を出たのが、お昼まえの十一時ごろ。それが昼を過ぎて四時がきよんのに、あっち、こっちして、まだ着けん。

どうも、おんなし所をぐるぐる回んりよったらしいんでよ。

ちょうど、田圃をしよる人がおって、道を言うてくれたんで、ほれからは、はっきりしてきましてな。どうやら、おばの家へ行くことができました。もちろん、昼間のことでしてな。夜ではないんでよ。

古い狸は、昼でも化かすので、昼の十二時ごろが一番、危ないんじゃないと言いますわ。』

次に、徳島市名東町の早淵さんの語り。

『野神さんの前に池があって、ここの狸は池の藻を使うて化よると言ったね。

ある人が見よったら、藻をすくうては体にへばり付けよる。ほれが、カスリとかなんとか、みな、着物の柄になると言うんでござる。

着物の柄というたら、夜、女の人に会うて着物の柄がはっきり見えるのはいかん。夜やけん、ほないに、はっきり見えるはずがない。それは狸が化けとのじゃと言いよったね。』

これら阿波弁での語りは、「阿波の狸」(飯原一



**写真① 徳島大学蔵本キャンパス
近く、蔵本駅傍の祠**

夫著、昭和50年(1975年)8月5日発行 教育出版センター)からの抜粋です。聞き取り場所は、眉山のふもと庄町の徳島大学薬学部から、おおよそ2km以内です。似たような話は、徳島県のどこにでも残されています。

タヌキの伝承には、そんな他愛もないものだけではありません。きわめて人間じみた、血生臭い話もあります。その代表は、徳島県のみならず、全国的にもよく知られている「阿波狸合戦」ではないでしょうか。

「狸の話」(宮沢光顕著、昭和53年(1978年)7月10日発行 友峰書店)によると、『これは阿波一国の狸が二手に分かれて合戦し、一方の大将である六右衛門狸が戦死。他方の大将金長狸が戦病死し、その跡目同志が二度の戦争を起こすという、すさまじい合戦』と紹介されています。以下は、それをかいつまんだ内容です。

時は、天保の頃(1831年から1845年)。所は、徳島市津田を流れる勝浦川。それぞれ600余の狸

が川を挟んで対峙します。その後、三日三晩続いた壮絶なる死闘。川岸一面が狸の死骸で埋まるとされています。主役は、四国の狸の総大将を自認する、小松島の六右衛門。そして、その元で修行をしていた金長。話は、六右衛門配下の四天王として名高い川島(吉野川市)の久左衛門、多度津(香川県)の役右衛門が企んだ、金長の闇討ちから始まります。身代わりとして殺害されたのが、金長の右腕、一の子分である藤の木(藤樹寺、小松島市)の鷹。金長は、血路を開いて日開野(ひがいの、小松島市)まで、命からがら逃げ延びます。大将としての風格十分な金長。体制を立て直し、徳島の庚申新八、北辰一刀流免許皆伝の田浦(小松島市)の太左衛門などを集めます。弔い合戦の始まりです。冒頭の勝浦川での三日三晩の死闘の末、六右衛門を討ち取ります。しかしながらその時の傷により、金長もまた身罷ります。さて、屋島(香川県)の禿狸のもとで修行をしていた六右衛門の子、千住太郎。敗残狸を集め、藤の木の鷹の長男にして2代目金長を名乗る、藤の木の小鷹に仕掛けます。ここで狸の絶滅を恐れた屋島の禿狸。両狸を仲裁し、和議を結ばせ手打ちとします。

伝承の時代設定、舞台描写、登場タヌキの多さ、その名前など。作り話としてはあまりにも練り上げられた情景のディテール。もっとも、この合戦譚、考えられる原話がありそうです。それは、かつてタヌキが大量死したことが実際にあり、それを娯楽として講談に取り入れたとする説。あるいは、勝浦川の南北に、それぞれ勢力を広げる宗教者同士の争いを、タヌキの争いに見立てた説、など。その中でも特に興味深いのは、雑誌「歴史人」ウェブ版コラムの『勝浦川を挟んだ小松島(南)と津田(北)の』『勝浦川両岸の砂を巡る争いだった』とする説です。それは、『藍染が盛んであったこの地域では、津田浦で採れる良質な砂が、藍染に欠かせなかったとか。藍葉の発酵に必要な寝床を作るのに使われたのだから。良質な藍を作るのに、より良い砂が古くから求められていたのではないだろうか。その争奪戦が、この狸の合戦物語へと姿を変えて伝えられた』からだ(と<https://www.rekishijin.com/19076>)。確かに「徳島から探究する日本の歴史」地方史研究協議会編、(令和5年(2023年)10月28日発行文学通信)によると、藍葉を『発酵させ、臼で搗い』て作られる藍玉は、『最後に砂を混入し搗き固め』丸める必要があるとしています。利潤の大きい『藍玉市場の独占支配』への執着。それが招いた2つ

の集団による利権闘争を背景として語られたのが、「阿波狸合戦」なのかもしれません。

実は、この金長狸には別話があります。人びとに虐められていた金長は、日開野の大和屋主人、茂右衛門に助けられます。その恩返しのため、その小僧万吉に取り憑いた金長。店を大いに繁盛させます。この大和屋、染め物屋であることから、「藍」をめぐる津田浦での砂利権の争いが、「阿波狸合戦」の下地である可能性、きわめて高いと感じます。万吉への憑依もなくなり、津田浦に多くのタヌキの死骸を見た大和屋茂右衛門。金長は死んだと判断し、金長大明神として祀(まつ)ります。店への功は忘れがたく、大明神への供物を絶やしません。さらに京都の吉田神祇管領所への嘆願も実ります。弘化5年(1848年)に金長は、ついに「正一位」を賜ります(金長神社を守る会ホームページ、<https://kinchodaimyojin.jimdofree.com/> 金長神社)。その後も日開野の大和屋にて、子々孫々にわたり祭祀されていたその祠。昭和31年(1956年)に現在の場所へと移されます。時は流れ、平成29年(2017年)。突然の「金長神社を取り壊す」とした新聞の見出し。小松島市行政当局の都市公園再開発計画の一環です。ついに「第二次阿波狸合戦」あるいは「平成狸合戦 part 2」の再燃です。反対した「金長たぬきの会」などの守る会。実に1万筆の保存嘆願の署名を集めます。そして再開発推進市長の交代を機に、現地存続の大逆転を勝ち取ります。さらにクラウドファンディングを活用し、修復費用も募ります。再び合戦を制した正一位大明神の金長。令和7年(2025年)現在も、小松島市中田町脇谷を、訪ねくるひとは絶えません(金長と狸文化伝承の会ホームページ、<https://kinchotanuki.jimdofree.com>)。

現実と空想が渾然一体となった伝承、「阿波狸合戦」。おそらくその原典は、江戸時代の阿波徳島にとって最も重要な換金作物「藍」をめぐる人間の露骨な利権争いだったのではないのでしょうか。ひと癖もふた癖もある古狸たち。その見立てとされたのがタヌキでした。そして、もう一つの阿波徳島の大切な伝統植物が誘発する問題行動。そこでもタヌキは冤罪を負わされたように思えます。

芳香73号の「芳香 SCIENCE」(39~43ページ、令和6年(2024年)3月25日発行)でも少しだけ記させてもらいましたが、「麓服(あらたえ)」は大

嘗祭には不可欠な品として、古(いにしえ)より天皇家から依頼を受けて納める麻の織物です。阿波忌部である三木家だけが、その作成と原料となる大麻の栽培を許されています。その阿波忌部一族の拠点は、今の吉野川市と美馬市に存在していた麻植(おえ)郡です。現在でも麻植塚と西麻植の駅名が残っています。ほかにも、「おおあささま」として地元では親しまれている阿波国一宮である大麻比古神社(おおあさひこじんじゃ)。その御神体である大麻山。そしてその周辺の四国八十八ヶ所第1番札所・霊山寺の門前町として知られる鳴門市大麻町。この大麻の地名、大麻比古神社の縁起書には、『神武天皇の御代、天太玉命(あめのふとだまのみこと)の御孫 天富命(あめのとみのみこと)勅命を奉じて 洽(あまね)く肥沃の地を求め 阿波国に到りまして、麻(あさ)楮(こうぞ)の種を播殖し、麻布木綿を製して 殖産興業の基を開き 国利民福を進め給ひ、その守護神として、太祖天太玉命を此の地に斎(いつ)き祀る』とあることから、その造営が由来でしょうか。17世紀後半から19世紀に飛躍的に作付けが増えた「藍」よりも古くから、「麻」は阿波徳島にて栽培されていた植物と思われます。四国観光の老舗である琴平バス(ことバス)のウェブサイトには、『稲作に不向きだった阿波国では、藍や大麻 綿など衣類の元となる作物を育て出荷。それを販売して得たお金で塩や食糧を購入する生活手段が、古くから成り立っていた』とあります(<https://www.kotobus-express.jp/column/2019/04/2-6.html>)。もちろん天皇家へ調進するための麻は、特別な場所で厳密に管理され続けているとは思いますが。しかしながら、神武天皇の御代に鳴門市大麻町に植えられた麻。少なくとも現在の三木家のある美馬市あたりにまで栽培範囲が広がり、阿波徳島の人びとの生活のための重要な換金植物だったことが窺われます。なお、大麻の地名は、北海道江別市にも存在します。ただしそれは「大曲」と「麻畑」の頭文字が由来のようで、残念ながら阿波徳島との関係はなさそうです。

ところで薬学雑誌の総論、「大麻成分の中樞効果：有用性と危険性」(三島健一、入江圭一著、*YAKUGAKU ZASSHI* 140, 193-204 (2020))によると、『大麻、別名「麻(アサ)」は、我が国では弥生時代から衣類として重要な位置を占めて』おり、『奈良時代の「万葉集」などにも掲載され』、『快樂や宗教的秘事の目的で使われた記録はない』としています。そして『このことは、幻覚や快樂を起こすような

物質の THC』(テトラヒドロカンナビノール)が『当時の日本の麻には含まれていなかったと推測できる』と。しかしながら『その後の中央アジアを原産地とした THC を多く含み、幻覚や麻酔作用の強いインド大麻』が『世界各地に分布し、日本産地の大麻も汚染された』とあります。薬理学的作用機序については、また別の機会に譲りますが、その『大麻による精神作用』は、『酩酊時には、まず知覚が過敏になり、色彩が異常に鮮やかに見え、見えるものの形は歪み、影まで色がつき、視覚機能の異常が現れる』ほか、『時間・空間の認知も障害され、時間の経過は極めてゆっくりと感じられたり』すると記しています。さらに『ラットに THC を投与するとまず少量で現れる作用は運動量の増加』であり、『さらに増量すると自発運動は逆に減少し、それとともに後ずさりや下肢を軸として回転するような奇妙な行動が発現』、『これは幻覚薬にも共通してみられる異常行動でもある』そうです。

さて、北進する日本三大暴れ川「四国三郎」は、中央構造線の北側に隆起した讃岐山脈にぶつかり、三次市池田町にて、その流れは東へと直角に変わります。そして南北に蛇行しながら流れていたため、かつては大雨により毎年のように氾濫する一方で、運ばれた肥沃な土壌により「藍」や「麻」の栽培を可能としていました。ここで話の流れも、その吉野川宜しく変わります。徳島県では現在、原則として「野焼き」が禁止されています。「野焼き」とは、法律で定められた焼却施設以外でごみを燃やすことです。しかしながら、農業者による稲わらの焼却など、農作業でのやむを得ない廃棄物の処置は、例外的に認められています。「あぜ焼き」も、田んぼのあぜ道に生えた枯れ草や雑草を燃やす農作業で、害虫駆除や病害虫の予防、雑草繁茂の抑制を目的とするため、例外として扱われています。実際現在でも「野焼き」はしばしばみられる光景です(写真② 徳島大学蔵本キャンパスから2km 以内の場所、夕刻 筆者撮影)。

さあ、これから時を巻き戻します。そこは、昭和22年(1947年)の「大麻取締規則」あるいは、その後の昭和23年(1948年)の「大麻草の栽培の規制に関する法律」が施行される以前。灌漑工事が技術的に難しく、長い間、稲作が営めなかった吉野川の中下流域では、藍と共に麻もまた、広く栽培されていたことでしょう。そして、法律も焼却施設もない時代。それら収穫後の残渣は、あちらこちらで「野焼き」などにより処理されていたのではないで



写真② 徳島市国府町
中央右が眉山、東に向かって

しょうか。

再び、前述の *YAKUGAKU ZASSHI 140*, 193-204 (2020) から。そこには、大麻の精神作用の主成分である THC は、『不活性のテトラヒドロカンナビノール酸』(THCA)『として含まれているが、大麻草をタバコとして喫煙するとき、その熱によって容易に2位のカルボキシ基が脱炭酸されて THC となり、強力な薬理作用を現すようになる』と記されています。

これは空想であり、妄想かもしれません。しかし、もし昭和 22 年(1947 年)以前の阿波徳島で、刈り取られた稲わらを「野焼き」にした時。あるいは、「あぜ焼き」をした時。大麻が雑草として、あるいは繊維として収穫した後の残渣が混入していたら。そして「野焼き」や、「あぜ焼き」による熱で生じた煙のなかの THC を、意識せずに吸い込んだとしたら。それにより、『時間・空間の認知も障害され、時間の経過は極めてゆっくりと感じられたり』、『下肢を軸として回転するような奇妙な行動が発現』したり、はたまた『色彩が異常に鮮やかに見え、見えるものの形は歪み、影まで色が』ついたとしたら。

するとどうでしょうか。冒頭での語り、『不動を出たのが、お昼まえの十一時ごろ。それが昼を過ぎて四時がきよんのに、あっち、こっちして、まだ着けん。どうも、おんなし所をぐるぐる回りよったらしいんでよ』。さらに、『ある人が見よったら、藻をすくうては体にへばり付けよる。ほれが、カスリとかなんとか、みな、着物の柄になると言うんでごわす。着物の柄というたら、夜、女の人に会って着物の柄がはっきり見えるのはいかん。夜やけん、ほないに、はっきり見えるはずがない』。このようなタヌキに責任を負わせた数々の「伝説」。それは、朝昼夕を問わ

ず、諸処で焼かれた煙を吸った語り手の、実体験。そのように思えてならないのです。

藍と大麻を産する阿波徳島。数知れずのタヌキの伝承のいくつかは、作り話にはあまりにも現実味を帯びています。その虚構性と一定の実在性が混濁した「伝説」。それは、実際にあった、あるいは目撃された、阿波徳島でしか起こり得ない体験談と思わせるリアリティが、確かに存在しています。しかしながら、戦後の大麻を規制する法律の制定、「野焼き」の禁止、宅地化による田畑の縮小、地域コミュニティの解体と再編などと時を同じくして、タヌキに関する「伝説」もまた、語られなくなります。タヌキが古狸か人間か。「阿波狸合戦」を生き延びた「徳島の庚申新八」。酒樽を担いだ小僧に化けたところを撃たれます。その死体は三日目にようやくタヌキに戻ったとか。そんな鉄砲で成敗されるタヌキもまた、時勢とともに、いなくなります。タヌキにとって、ようやく平和な時代が訪れたのかもかもしれません。濡れ衣を着せて、謂れのない罪をタヌキに押し付けた人びとの贖罪。また祟りへの恐れや鎮魂。あるいは禍事・災難を取り除く八方除けや厄除けのため。そこかしこに祀られているタヌキの小さな祠が、数えきれないほど阿波徳島にある理由。それは、それだけ人びとの暮らしのすぐ近くで、タヌキに見立てる、あるいは転嫁することでしか昇華することができなかった、あからさまな、度を越した人間の露骨な欲望や偏見、また常識では理解不能な出来事が、実際に、そして頻繁に起こっていたからではないでしょうか。他のどこででもなく、ここが阿波徳島であるが故に。

縁あって徳島県に移り住み、10 年近い年月が経ちました。研究室横の非常階段から眺める夜の眉山の闇の中。その黒い裾野や中腹には、徳島藩主蜂須賀家の墓所や、大小新旧多くの神社仏閣、そして幾多の墓や墓跡が散在しています。その月影に青白く、そして柑子色に光る有名無名のタヌキたちの眼差し。空想や妄想そして過去と現在が、同じ時空に生々しく絡みついた四国霊場の起点。冬の初めの阿波徳島からの報告です。

同窓会 HP:2026 年 3 月 3 日公開